

今号では「条件文」(oración condicional)を扱います。「もし～ならば、～する」の前半部分を条件節(prótasis)、後半部分を帰結節(apódosis)と呼びます。今号では接続詞 si を使った基本形を確認することにします。

条件文の用法は複雑で教科書や参考書によって説明が異なります。研究者の間でもいろんな見解があるのですが、ここではなるべく単純化して説明します。特に条件文の時制の使い方は独特な面があるので注意が必要です。

まず、「Si+直接法」と「Si+接続法」に大きく分けて考えます。後者はさらに「現在に言及」するか「過去に言及」するかで2つに分けます。以下、①～③として説明します。

【条件文の3基本形】

①現実的条件文

Si -o, -ré

代表的文法形式

Si tengo dinero, iré a España.

もしお金があったらスペインに行こう。

②非現実的条件文(現在)

Si -ra (se), -ría

Si tuviera dinero, iría a España.

もしお金があったらスペインに行くのに。

③非現実的条件文(過去)

Si -hubiera (se), -ado, habría -ado

Si hubiera tenido dinero, habría ido a España.

もしお金があったらスペインに行っただろうに。

まず、①の条件文は、あり得る仮定を表します。上記例文では条件節に直説法現在を使い、帰結節には直説法未来を使っています。「今はお金がないけども多少貯金があったときには」などと未来にあり得ることを想像しています。

後半の文には現在形や命令形などが来ることもよくあります。以下、それぞれの例文です。

①Si no llueve, salgo de paseo antes de cenar todos los días.

雨が降らないと私は毎日夕食前に散歩に出かける。

①Si llegas antes, esperamos a la entrada del Campus.

もし先に着いたらキャンパスの入り口で待ってて。

もちろん事実を表す条件文は過去系列の時制を使う場合もあります。

①Manuel me dijo que vendría a la fiesta si le daban ganas.

マヌエルは気が向いたらパーティに来ると私に言った。

この例文でマヌエルが実際にパーティに行ったかどうかはわかりませんが、私に話した時点ではその仮定は実現の可能性があったと言えます。

さて、それでは続いて反実仮想(②と③)を見ていきましょう。実際に表している時と動詞の時制がズレていることに注意しましょう。原則は英語と同じなので英語の対応する形も参考までに挙げておきます。

②Si tuviera dinero, iría a España.

もしお金があったらスペインに行くのに(でも、ないので行けない)。

If I had money, I would go to Spain.

実際に言及している時は「現在」ですが、形式的には「接続法過去+過去未来」を使います。

この形式は未来のことに言及することもあります。例えば、

②Si nuestro equipo ganara mañana, pasaría a la semifinal.

もし我々のチームが明日勝ったとしたら、準決勝に進むことになるだろうが。

これは明日のことを言っていて勝つか負けるかはまだわかりません(未来は未確定なので)。しかし、話者は勝つことは困難だと考えています。つまり、話者の気持ち的に「非現実的」なのだご理解ください。

次の例文では、「婉曲」の意が込められています。

②Si me ayudara usted, se lo agradecería mucho.

もしあなたが私を助けてくださるならとても感謝することでしょう。

「助けてくれる」ことを「あり難い」仮定として表現することで「丁寧」、「謙虚」の意味が生じます。

最後に「非現実的条件文」の「過去」の例文③ですが、「言及している時」は過去ですが、文法形式は「接続法過去完了+過去未来完了」であり、やはり時制のズレがあります。

③Si hubiera tenido dinero, habría ido a España.

もしお金があったらスペインに行ったのに(お金がなかったので行かなかった)

If I had had money, I would have gone to Spain.

スペイン語で“Lo pasado, pasado”(過ぎたことは過ぎた)という言い回しがありますが、過ぎてしまったことは決して覆りません。ですから、この形式は過去の反実仮想になります。habría ido の代わりに hubiera ido もよく使われます。これは歴史的に古い形が現在でも残っているためです。

以上、概要を説明しましたのでまずはこの形式をマスターしてください。ただし、実際には上記の形式に当てはまらないケースも多々あります。いくつかの例を説明します。

Si no hubiera llegado Colón a América,

en la actualidad no se hablaría español en tantos países.

もしコロンブスがアメリカに到着していなかったならば、

現在こんなに多くの国でスペイン語が話されていなかっただろう。

この例文は、反実仮想の文ですが、前半が過去について、後半が現在について言及しています。つまり前述の③の前件と②の後件との組み合わせだと考えれば理解できるでしょう。

実際の言語の運用においては公式通りにいかないことがよくあるものです。以下の例を見てください。

Si lo sé, no vengo.

もしそれを知っていたら来なかったのに。

(= Si lo hubiera sabido, no habría venido.)

口語的な表現です。カッコ内が本来の形式ですが、これに従わなくても文脈上、反実仮想だとわかる場合はあえて難しい形式にする必要はないので、前件、後件ともに現在形で済ませています。そもそも仮定文の形式は難しいので可能な場合はそれを使わずに済ませたいと話者が考えても不思議ではありません。ちなみにスペイン語話者の子どもが一番最後に修得する複文が条件文だそうです。それだけ難しいということですね。

最初に言ったように条件文の3つの基本形式を確実にものにしてから次に進む方が理解しやすいと思います。次号は条件文の続きの予定です。



仲井 邦佳 / Kuniyoshi Nakai

立命館大学産業社会学部教授。専門はスペイン語学。著書に『はじめてのエスパニョール』(共著、三修社)、『中級スペイン語一文法と演習一』(共著、同学社)などがある。